



映画監督

諏訪 敦彦^{のぶひろ}さん

8年ぶりの監督作品『ライオンは今夜死ぬ』が、今年1月に公開となった諏訪敦彦さんにお話を伺いました。ヌーヴェルヴァーグ（1960年前後にフランスで起きた映画運動）の象徴的俳優ともいえるジャン＝ピエール・レオーを主演にむかえ本作を制作した経緯、子どもに向けた映画教室への取り組み、映画監督という役割につき、熱く語ってくださいました。

（聞き手・構成：高橋 辰三，岡田 隆司）

——今年1月に日本公開となった『ライオンは今夜死ぬ』は、前作『ユキとニナ』に続いてフランスとの合作になりますけれども、制作のきっかけを教えてください。

5年前に、フランスのラ・ロシュ・シュル・ヨンというところで映画祭がありまして、僕の特集上映を企画してくれて、全作品が上映されました。その同じ映画祭に別のセクションで、ジャン＝ピエール・レオーの特集があったんです。ジャン＝ピエール・レオー氏がその映画祭に呼ばれて来て、彼がプログラムを見て、この諏訪というのは誰だということで、興味を持ってきて、「作品を見たい」とプロダクションに連絡があり、作品をお送りしたんです。それで、向こうから「ぜひ会いたい」という話があって、お会いしたのが始まりだったんです。その時点では何もアイデアはなくて、ただ彼と映画を作るぞという気持ちだけ確認して。

ただ、当時、僕は前任校の学長を務めていて、毎日会議ばかりやっているような日々だったんです。なので、企画になっていくのに3年、4年と経ってしまったんですけど。

——ジャン＝ピエール・レオーさんが諏訪監督の作品で、特に気に入った作品は何だったのでしょうか。

『不完全なふたり』という映画がありまして、ジャン＝ピエールにとってはすごくヌーヴェルヴァーグの精神を感じたというか、何度も見たと言っていました。

——逆に諏訪監督が今回『ライオンは今夜死ぬ』を撮るに当たって、ジャン＝ピエール・レオーの映画でこれを意識したとか、思い入れのある作品はありますか。

大学の頃はかなり集中的に60年代のフランス映画を見る機会があったんですね。10代から20代に何かに出会うということは誰しもあると思うんですけど、それが僕にとってヌーヴェルヴァーグの映画でした。その中でとりわけジャン＝ピエールという存在は本当に印象的だったんです。共感といたらおかしいですけど、自分にすごく近いものに思えたり、特別な存在でしたね。

僕がフランスで映画を撮るようになってから、彼に出てもらいたいと思ったことは過去にもあったんです。ただ、ジャン＝ピエールはかなり特殊な人で、フランソワ・トリュフォーが亡くなってからは、かなり精神的な危機もありましたし、彼自身本当に傷ついている人なので、慎重を要するというか、あまり安易に彼の映画的な記憶に依存してキャスティングすべきじゃないという、僕たち仲間の中でもそういうディスカッションもあって、ちょっと遠慮してきたんです。

——諏訪監督のこれまでの作品、『2/デュオ』や『M/OTHER』でも、役者が演技をしているというより、役者個人に迫るような部分もありましたけど、ジャン＝ピエール・レオーの影響もあるのでしょうか。

いや、やっぱり違うんですね。『M/OTHER』では、三浦友和さんとか渡辺真起子さんが即興で演じているわけですから、非常に生々しく聞こえるわけですが、その生々しさというのはあくまでフィクションとして、その人物をちゃんと形作っていくという方向にやっぱり向かっていくだけけれども、ジャン＝ピエールの場合は、簡単に言うと何をやってもジャン＝ピエール・レオーなんです。こういう人はたぶん映画の外にはいないでしょう。だからフィクションだけを信じさせるというよりは、映画を作っていることも含めて、すべてがジャン＝ピエール・レオーのドキュメンタリーじゃないかというふうに思えるところがあって、すごく特殊な存在だなと思うんですね。

——今回の作品は新たな挑戦という色彩が強いのでしょうか。

まあ、翻って見ると、学生のころ作った映画とあまり変わってないなという気もするんですけど（笑）。何十年もかかって全然進歩してないんだなという気持ちもあります。ただ、『2/デュオ』とか『M/OTHER』では、ある種の現実感、リアリティーみたいなもののがかなり強く前面に出てくるだけけれども、今回はそのフィクションの現実感というよりは、非現実とか映画でしか表現できないことを、もっと受け入れていきたいというか。彼と最初に会ったときに、ああ、この人を撮ると、今まで撮ったことがない空間というか、あるポエティックなものが撮れるんじゃないかなという気がしたんですね。その人がいるだけでその空間が詩的になる、ポエティックにねじれていくというか、そういう面白さをすごく実感しています。

——ジャン＝ピエール・レオーという、都市にいるイメージですが、今回南仏が舞台ですね。

選んだ理由は非常に現実的な理由で、美的な理由ではないんです。実はこのプロジェクトが始まっていくプロセスの中で、ジャン＝ピエール・レオーとやるというのと、もう1つ、子供とやるというテーマがありました。

日本で「こども映画教室」という6歳から12歳の小学生を対象にした映画制作のワークショップをやっていて、これは、いろいろなところから集まってきた

子たち20人ぐらいがチームに分かれて、3日で映画を作るというワークショップなんです。それが非常に面白いので、フランスでも子供たちとワークショップをやりながら、そこから映画制作に移行していくというか、彼らと一緒に映画を作っていくというふうになったら面白いんじゃないかなと思って。単に彼らに役者として出してもらわなくて、彼らが映画を作ること自体を映画の中に招き入れていくというか。

ただ、僕たち、フランスで子供を集めてワークショップをやるノウハウがないので、フランス中の、演劇とか映画のワークショップをやっているグループに情報発信したら、いくつかのグループが返事してくれて。最終的に一緒にやろうと思ったグループが、ちょうどグラスという南仏の地域だったんです。そこに非常にパワフルなおばちゃんがいまして、20人ぐらいの子供を集めてくれて。気がつくと、この南仏の光の下でこの映画を作るということになっていたわけです。

——「こども映画教室」は、いつごろから携わられているのでしょうか。

2012年ぐらいですかね。最初は金沢のシネモンドという映画館が中心になって始めたものです。最初は鑑賞教育だったんですけど、作るのもやってみようということで、誰か監督が1人必ずやって来て指導する方針になって。今は全国的にいろいろなところでやっています。

——諏訪監督は東京藝大の教授もされていますが、学生の映画に対する取り組みには、どんな印象を受けますか。

映画を大学のカリキュラムに組み込むというのは、ここ20年ぐらいの間はかなり進んだと思いますが、教える側の問題としては、何を目的として映画を教えるのかというのは、未だにあまりクリアじゃない状況でやっていると思います。

映画を作りたいという情熱は、若い世代の中にありますね。海外から見ると日本という国は映画文化が非常に保護されているはずというイメージを持っています。ですから、日本に来た人は愕然とするわけですね。芸術系の映画館もわずかだし、それをサポートするシステムもないし、国が若い人たちを助成しているわけでもない。まあ、僕は今回文化庁の支援を受けま

したけど、若い人たちが出ていくための支援ってなかなかない。この厳しい現実にもかかわらず、たくさん新しい映画が出てくるのは、日本の映画の力だと思うんです。溝口（健二）さんとか小津（安二郎）さんとか、そういう先人がいたから、日本映画が海外で受容される土壌ができていますよね。この間イランに行きましたけど、テヘランの子たち、たくさん見えますよ、小津とか黒澤とか。日本映画を見たいという人たちがまだたくさんいるわけで。そのことがあって、僕たちも映画を送り出すことができたと思うんです。

——監督の最初の作品は、おいくつぐらいのときの作品なのでしょう。

初めて、一応作品として発表したのは、大学のときに8ミリで撮った映画です。『はなされるGANG』という、それは「ぴあフィルムフェスティバル」に応募して、入選することができて。ほとんどヌーヴェルヴァーグのまねですね。

——舞台は東京でしょうか。

浅草とか。フィクションなんだけど、結局現代映画ってフィクションをフィクションですよと見せちゃうという、これはゴダールとかもそうですし、どうせ嘘ですというふうにしちゃう映画というのがある時期から登場してくるわけですが、そういうことをやっているわけです。浅草か何かにギャングが2人出沒して、逃走劇を演じるみたいな話でした。そのときにこの2人の俳優のドキュメンタリーとして僕がそれを撮影していたようなところがあった。

——賞を受賞されて、その後は。

就職してないんですよ。

——それではずっと映画監督ということに。

結局映画監督というのは、いわゆる職業といえはいるんですけど、僕も今回の作品に8年ぐらいかかっているわけです、前の作品から。じゃあ、8年間僕は映画監督であり続けていたのかというと微妙ですよ。それでお金をもらっていたわけではないし。本当に一握りの人たちだけが次から次へと撮っているんです。そういう人たちは映画監督が職業といえるの

かもしれないけど、僕は1カ月半撮影して、半年ぐらいかけて編集して、その間は確かに映画監督という役目を果たしていると思うんですけど、それが終わってしまうと、映画監督といえるのだろうか。映画監督になりたいというふうに考えたこともあんまりないですよ。ただ、映画にできるだけ近くにいたいとか、そういう気持ちはもちろんあったと思うんですけども。

——東京造形大学の学長をされていましたね。

5年ぐらいいやりましたかね。2期目の途中で辞めました。

——その前は東京造形大学の教授で。

教授になって1年ぐらいいしか経ってなかったですから、まあ、びっくりですね。でも、学長は重責ですが、結局僕がやらなくても誰かがその役を務めるわけです。だから、映画はやっぱり自分でできなきゃいけないことというのがまだあるような気はしましたね。もう1つ今思っているのは、「こども映画教室」じゃないけど、映画を教育としてどういうふうに使えるのか、どういう可能性があるのか、少し試してみたいなという気持ちはあります。

——離婚とか、現実的なテーマの作品が多いと思いますが、何か思いがあるのでしょうか。

『2/デュオ』とか『M/OTHER』とか『不完全なふたり』ぐらいいまでは、すごく日常的な問題を扱っていますよね。まあ、自分が離婚したわけじゃないんですけど、想像し得る問題とか、自分たちが抱えている問題とか。そういうのは誰でも共有できる問題だし、しかも、ある意味で非常に厳しい人間関係の局面というか、ささいなことだけど厳しいことというか、まあ、そういうものにフォーカスを当てていたと思うんです。

今回の映画は、死という問題ではありますが、ことさらに深刻に、あるいは非常にリアリスティックに描きたいとは思ってなくて、映画でなければ表現できない楽しみがあったいいと思うんです。何かこう、明るい表現に変化しているような気がするんですね、自分の中で。楽しい映画になってほしいなという気持ちもあつたし。

たぶん明らかにフクシマの問題とか、関係している

と思います。『2/デュオ』や『M/OTHER』の頃は、映画は厳しいんだけど、日本社会はまだのんびりだったと思うんです、バブルは終わっていましたが。だから、あるつらい現実を直視する力が、僕の中にもあったと思うし。だけど本当につらいこととか、人が弱ったときに、あまりにも厳しい現実をもう一度映画で見るといえるのは、とても体力があるよなと思って。時代があまりよくないので、映画の中で暗くなりたくないという気持ちは、反比例していると思うんです。

— これからもフランスを舞台に作品を撮っていきたいとお考えですか。

行きたいかどうかより、ノーチョイスなんです。結局サッカー選手と一緒に、チームが呼んでくれないとプレーできない。Jリーグは呼んでくれないんですよ。フランスリーグだと、まあ、一応大丈夫、お前プレーしていいよと言ってくれるので。向こうでやるのは自分のホームタウンな感覚です。だから日本で撮るとなったらかなり緊張します。これはアウェーですよ(笑)。

— 映画監督になれる人と、なりたくてもなれない人があって、諏訪監督は見事映画監督になっているというのは、ご自身ではどんなふうに思われているのでしょうか。

うーん。映画監督になるのは簡単ですよ。例えば小学生でも映画を作れちゃうわけですよ。小学生、3日で完成させちゃうんですよ。映画監督であるとか、映画を撮ったんだということは、たぶんそんなに難しいことではないんですよ。だけど、それを継続していくのは難しいということですね。継続していったり、本当に商業的な映画を撮って、お金を稼ぎたいというふうになってきたときには、自分の力だけではどうしようもないところがあります。

— 監督が今の諏訪監督になったのは、どのぐらいが自分の意志という感覚なのでしょうか。

自分自身の実感としては、僕は人に言われたことをやってきたと思うんですよ。映画を撮ったときも、昔の仲間だった友達が、俺がちょっと金を集めてプロデューサーをやりたいから、お前何かやれと。それが『2/デュオ』ですよ。助監督をやっていたときもそう

ですし、お前これをやれと、これをやってみないかと言われたことをやってきた、学長をやれと言われたからやりましたという、その、言われたことの中でベストを尽くしてきたという感覚が強いですね。たぶんね、無意識だったと思うんですよ。だから、監督になりたいからこれを今やろうとか、そういうことじゃなくて。例えば、助監督をずっとやって、その後企業のPRビデオとかいっぱい作ったんです。いわゆる商業的な花形の仕事じゃなくて、企業内で教育するビデオとか、販売促進用のビデオとかですけど、そのときに、何でこんなことをやっているんだろうとか、いつか映画を撮りたいなと思ったことは一度もないんですよ。この中でベストを尽くすというか、この中で何ができるのか、そこで自分ができることを120%やってみていくみたいな気持ちでずっと来たと思うんですよ。与えられた環境の中でベストを尽くす。ただ、どんな仕事でも映画だと思ってやっていたと思いますよ。

— 日本の法律、弁護士には、どのような印象をお持ちですか。

弁護士の方というのは本当に大変な仕事だと思うんですけど。でも、著作物の問題というのは、本当は僕は、作家が自分の権利を主張しなきゃ、守らなきゃと、あんまり思っていないんですよ。だって、監督が著作者だというのはギミックなので、本質的な問題じゃないんです。だから、クリエイティブ・コモンズみたいなものの方が何か、僕にはフィットします。著作物というのはすべての人の共有財産であっていいのではないかというふうに思うところもありますね。

プロフィール すわ・のぶひろ

映画監督、大学教授(東京藝術大学)。1997年に公開された『2/デュオ』で長編映画監督デビューの後、1999年公開の監督作品『M/OTHER』で、第52回カンヌ国際映画祭の国際批評家連盟賞を審査員全員一致で受賞。2005年には、全てフランス人キャスト・スタッフによる『不完全なふたり』(日仏合作)がロカルノ国際映画祭において審査員特別賞と国際芸術映画評論連盟賞を受賞。その後もフランスを活動拠点とし、オムニバス映画『パリ・ジュテーム』(2006年)への監督参加、フランス人俳優との共同監督による『ユキとコナ』(2009年)がカンヌ国際映画祭において高い評価を受ける。2018年、8年ぶりの監督作品『ライオンは今夜死ぬ』(2017年)が公開された。